第1章　豊橋市の概要

1. 沿革

この地方は、古くは穂国（ほのくに）と呼ばれていたが、大化の改新の頃三河国に統合され、鎌倉時代には今橋と言われるようになった。

その後、永正 2 年（1505 年）に牧野古白が今橋城を築いてから、政治的・軍事的要地として戦国武将の攻防が繰り返され、今川義元の支配する吉田と改称され、江戸時代には譜代大名 9 家 22 代にわたる城下町として、また東海道五十三次 34 番目の宿場町として当代交通の要衝であった。

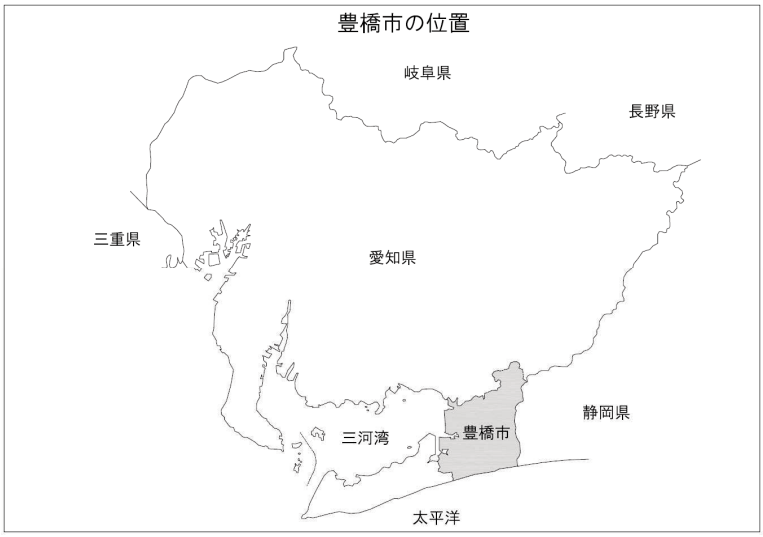
明治 2 年に吉田は豊橋と改称され、同 22 年に町制施行を経て、明治 39 年 8 月 1 日、県下で 2 番目に市制を施行し、人口 37,635 人の豊橋市が誕生した。

戦前は、糸の町あるいは軍都として発展し、特に蚕糸業は本市の代表的な産業であり、豊橋の象徴でもあった。昭和 20 年の空襲で市街地の 90％を焼失したが、終戦後には戦災復興事業、都市計画事業の推進により都市整備が行われ、公園・街路樹などの緑豊かな都市として生まれ変わり、太平洋ベルト地帯の中間に位置する恵まれた地理的条件のもと、工業整備特別地域、農業経済圏などの指定に基づく開発、整備とともに、三河港も国際貿易港として整備が進み、自動車輸入が台数、金額とも全国一となるなど、全国有数の自動車貿易港としてめざましい発展を遂げている。

平成 11 年 4 月 1 日に全国で 22 番目の中核市となり、平成 18 年 8 月 1 日には市制施行 100 周年を迎えた本市は、平成 23 年 3 月に新しいまちづくりの指針となる「第 5 次豊橋市総合計画」を策定し、「ともに生き、ともにつくる」をまちづくりの基本理念に定め、「輝き支えあう水と緑のまち・豊橋」の実現に向けた取組みを進めている。また、将来にわたって活力を保ち、持続的な発展を図るため、平成 27 年 10 月に「豊橋市まち・ひと・しごと創生総合戦略」を策定し、創生に向けた取組みを総合的に推進している。

2. 地理

本市は愛知県の東南端に位置し、東は静岡県、北は豊川市・新城市と接し、南は太平洋、西は三河湾に面し、温暖な気候に恵まれている。また、東西大経済圏のほぼ中央に位置しており、東京駅及び大阪駅から 2 時間以内の行動圏域にあり、ハイウェイ・ネットワークでも東西大経済圏から4時間圏域に包含されるなど、陸海交通の要衝をなしており、恵まれた立地条件にある。



○市の広さ（令和元年 7 月 1 日現在）
- 面積：261.88km^2
- 東西距離：17.8km
- 南北距離：23.9km

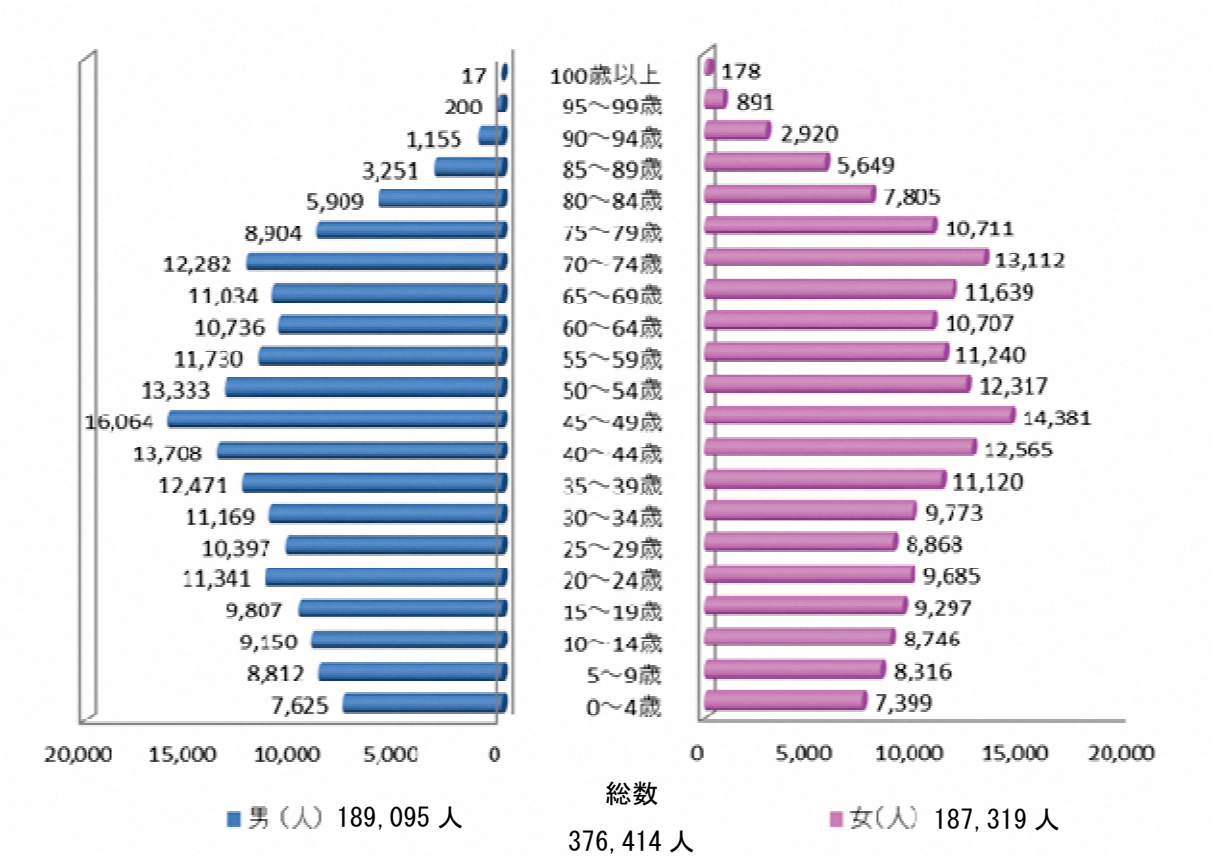
○気候（令和元年）
- 平均気温：17.3℃
- 最高気温：36.5℃
- 最低気温：－0.8℃

3. 人口

(1)年齢別人口

本市の年齢別人口の特徴としては、若年層が低く少子化が顕著となっている。将来的には就業者人口の減少による産業への影響が懸念されます。

○年齢別人口　　(令和 2 年 4 月 1 日現在)



資料:豊橋市年齢(各歳)男女別人口表

(2)産業別就業人口

平成 27 年国勢調査における 15 歳以上の就業者総数 179,590 人を産業 3 部門別にみると、第 1 次産業は 10,237 人(5.9%)で、第 2 次産業は 53,460 人(30.9%)、第 3 次産業は 109,158 人(63.2%)となっており、第 3 次産業への移行が進んでいる。ただし、本市は農業産出額が全国有数の農業地域であり、他の主要都市や全国との比較においては第 1 次産業の割合が高い傾向が見られる。

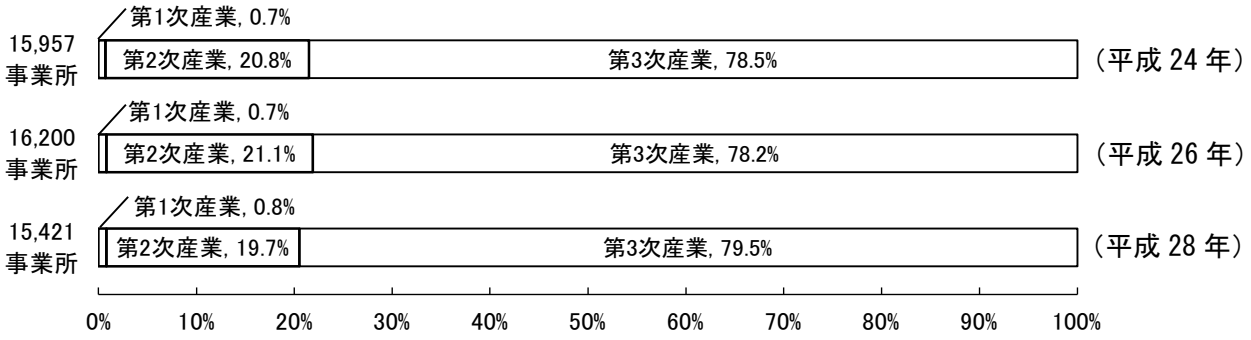
また個別業種(大分類)では、製造業の 53,460 人(29.8%)が最も多く、次いで卸売・小売業の 29,130 人(16.2%)、医療・福祉の 19,229 人(10.7%)、建設業の 14,263 人(7.9%)の順となっている。

○産業別就業人口(15 歳以上)の中部地方主要都市の比較　　(単位:%)

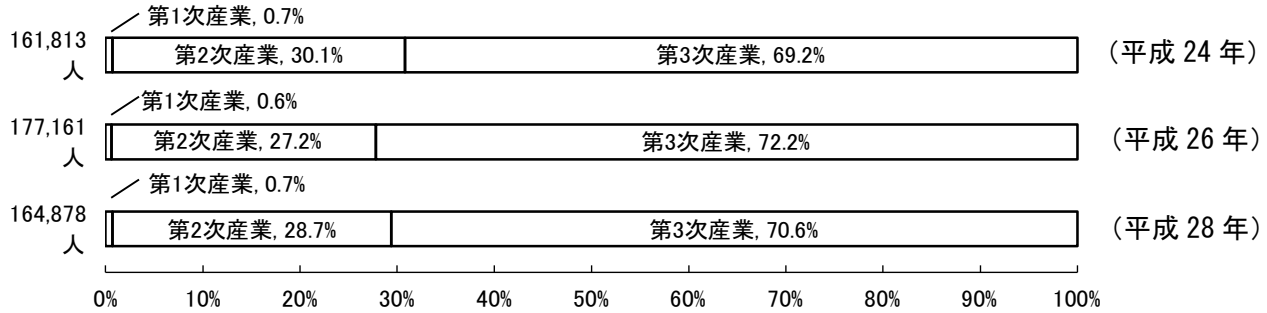
都市名 / 産業	豊橋	名古屋	豊田	岡崎	一宮	浜松	静岡	岐阜	四日市	長野	全国
第 1 次産業	5.9	0.2	0.5	1.6	1.3	4.1	2.6	1.7	1.3	5.9	4.0
第 2 次産業	30.9	21.5	53.2	36.1	28.3	31.5	25.2	19.4	34.8	21.5	25.0
第 3 次産業	63.2	78.3	46.3	62.3	70.4	64.4	72.2	78.9	63.8	72.6	71.0

資料:平成 27 年国勢調査　　※分類不能の産業は除く

○産業別事業所数の推移



○産業別従業者数の推移



資料：経済センサス基礎調査（平成 21 年、26 年）、経済センサス活動調査（平成 24 年、28 年）

(3) 昼夜間人口及び流出入人口

平成 27 年国勢調査における流出人口（市内に常住し、市外で従業・通学）は 48,385 人、流入人口（市外に常住し、本市で従業・通学）は 37,519 人であり、流出人口が流入人口を 10,866 人上回った。平成 22 年調査からは、流出人口が 3,951 人、流入人口が 1,092 人増加し、流出入人口の差は 2,859 人の拡大となった。平成 12 年調査で初めて 100％を下回った昼夜間人口比率（夜間人口に対する昼間人口の比率）は、平成 27 年調査でも低下しており、夜間人口が昼間人口を上回る傾向が続いている。

○昼夜間人口及び流出入人口

年	市内常住人口		市内従業・通学人口		流出入人口の差（人）	夜間人口に対する昼間人口比率（%）
	総数（人）（夜間人口）	流出人口（人）A	総数（人）（昼間人口）	流入人口（人）B	A－B	
昭和 55 年	304,256	22,953	311,407	30,104	△ 7,151	102.4
60 年	322,136	27,861	325,610	31,335	△ 3,474	101.1
平成 2 年	337,705	35,192	338,443	35,930	△ 738	100.2
7 年	352,840	38,515	354,060	39,735	△ 1,220	100.3
12 年	364,147	40,941	362,791	39,585	1,356	99.6
17 年	371,534	45,258	364,999	38,723	6,535	98.2
22 年	376,665	44,434	368,658	36,427	8,007	97.9
27 年	374,765	48,385	363,899	37,519	10,866	97.1

資料：国勢調査